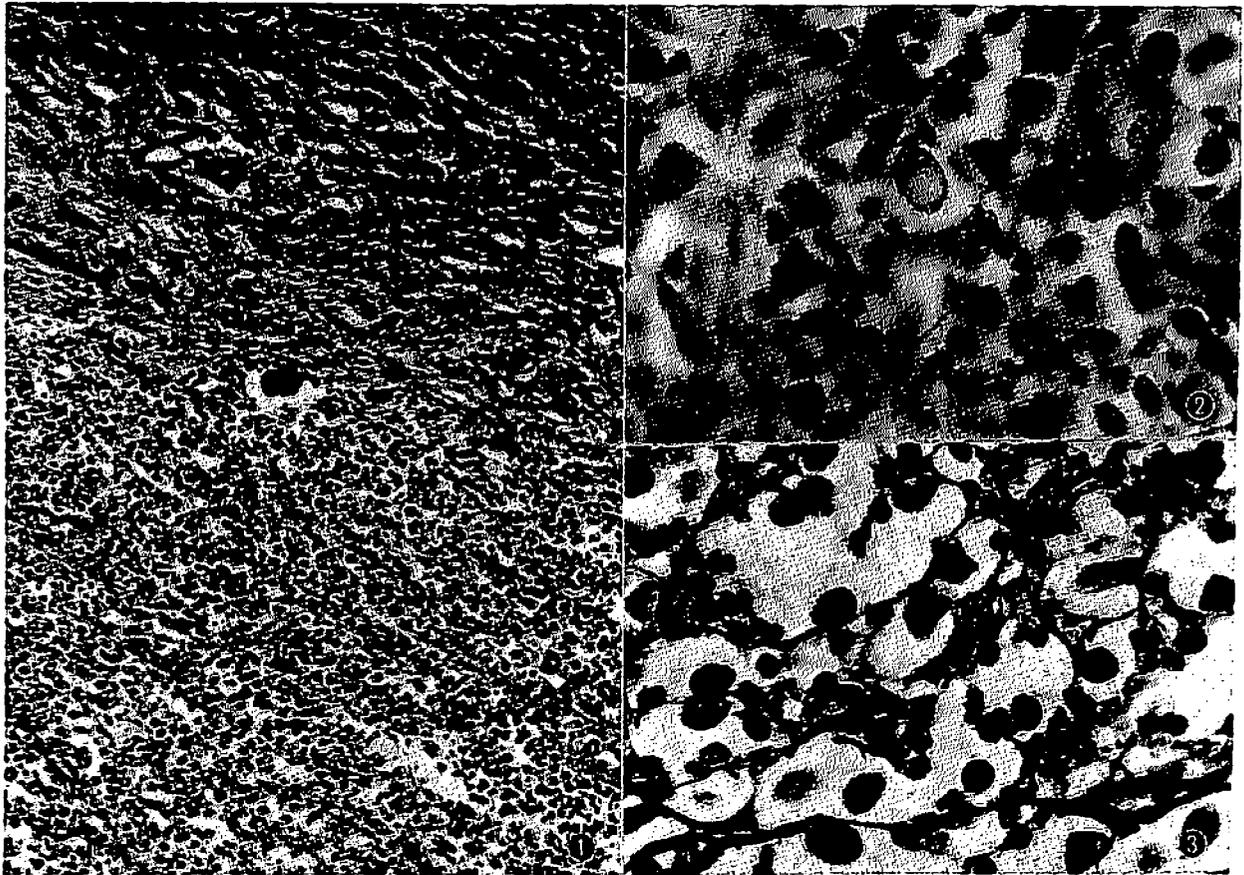


犬の顎凹部の肉芽腫

日本獣医畜産大学家畜病理学教室出題 第16回獣医病理学研修会標本 No.237



動物：土佐犬，雄，2才（1973年9月24日生），闘技犬。 標本：摘出手術された顎凹部の腫瘤をホルマリン固定材料として持参されたもの。

臨床的事項：本例は，8ヵ月令と11ヵ月令時に闘技に参加しているが，この時点においては，とくに異常は認められなかった。しかし，1才10ヵ月令時頃から流涎，顎凹部の腫脹・下垂，元気・食欲の減退などが現われた。そこで某家畜病院にて加療されたが，回復の徴候がみられないので，本大学家畜病院に搬入され，2才時（1975年9月29日）に顎凹部腫瘤の摘出手術をうけた。本犬は，その後次第に回復し，現在は元気で，闘技犬として活躍している。

肉眼的所見（材料提供者による）：この腫瘤は，左側顎凹部に位置し，下顎筋組織に包まれた感じで，7cm（前後）×6cm（左右）×2cm（厚さ）の大きさを有し，腫瘤と皮下結合組織との剝離は容易である。その硬度は周囲の筋組織とほぼ同程度であるが，表・剖面はいずれも若干赤色気味で，光沢があった。

組織学的所見：この腫瘤は，外側は変性，壊死を伴なう結合組織により被われており，その内側の横紋筋線維もまた変性，壊死に陥り，深部に進むにしたがいこの筋線維は萎縮，硝子様化が目立ち，本例においてとくに注目したい組織球性細胞増殖巣に移行していた。この移行

部には筋原性の巨細胞も認められ，また結合組織の増生も著しい（写真1，HE，約120倍）。

組織球性細胞増殖巣において主体をなすものは，主として中～大型の円形，卵円形あるいは楕円形の組織球性細胞と思われる細胞であり，この核もほぼ円形あるいは腎形で淡明である。細胞質は，比較的豊富で，エオジンに淡染または濃染し，空胞状あるいは異物を貪食していると思われるものも認められた。このような細胞が主体となって増殖する中に，小型の円形空胞状で核膜の濃染する多核の細胞も多数認められた（写真2，HE，約600倍）。この細胞は，既存あるいは増殖した細胞の変性あるいは壊死したものであろうと推察される。また，これらの細胞のほかにヘマトキシリンに濃染し，ギムザで濃青色に染まる肥胖細胞も散在し，さらに部位によっては小血管の増生や出血なども加わり，多彩な像を呈していた。鍍銀染色では，組織球性細胞と多核の変性，壊死したと思われる細胞は，いずれも好銀線維に付着していることがわかる（写真3，HE，約600倍）。

組織診断：組織球性細胞と表現してきた細胞は，おおむね均一であること，好銀線維に付着していること，横紋を確認し得なかったことなどにより，本例を組織球性細胞を主体とした肉芽腫と診断した。

討議：肥胖細胞腫あるいは筋原性の腫瘍ではなかろうかなどの意見が出された。